

第56回

イラン
Iran

イラン石油をめぐる 英国と米国の野心

リクルート=スタディサブリ講師 村山 秀太郎

古代から珍重されてきた石油

石油利用の歴史は非常に古い。すでに石器時代には、天然に染み出したアスファルトや油が接着剤や防水材として利用されていた。古代メソポタミアでは建築や船の防水にも使われ、医療用としても珍重されて万能薬のように扱われた地域もあった。

日本でも古くから石油の存在は知られていた。『日本書紀』には、越の国から燃える水や燃える土が朝廷に献上された記録があり、これは天然石油やアスファルトと考えられている。当時の天皇である天智天皇の時代には、すでに石油が珍しい資源として認識されていたのである。

中世になると、ビザンツ帝国は石油成分を利用した兵器「ギリシア火」を開発した。これは海戦で敵艦を焼き払う強力な火炎兵器で、水をかけても消えにくかったとされる。

20世紀には国家戦略物資に

近代石油産業の出発点は、1859年にエドウィン・ドレークがアメリカ・ペンシルベニアで機械掘り^{ゆせい}油井を成功させたことである。これによって大量採掘が可能になり、灯油需要と共に石油産業が急成長した。

さらにジョン・ロックフェラーは巨大企業スタンダード・オイルを築き、石油の精製・輸送・販売を支配して世界経済に大きな影響を与えた。



スタンダード・オイルの株券(1887年)

ジョン・ロックフェラー

(写真: Wikipedia)



20世紀には石油は国家戦略物資となった。特に日本は資源不足を補うため、現在のインドネシアにあたるオランダ領東インドの石油資源を重視し、ロイヤル・ダッチ・シェルの製油所を占領した。これは日中戦争以後、日本が長期戦を続ける上で不可欠だったためであり、欧米との対立激化の一因にもなった。

大英帝国の生命線

イランの石油をめぐる英国と米国の野心は、19世紀末から20世紀後半にかけての中東政治を大きく左右した。もともとイランではガージャール朝の時代に、王侯貴族の一部が実権を握り軍事力の弱体化もあって、ロシアや英国が経済的利権を拡大した。イラン人の多数はペルシア系だが、王朝や軍部にはしばしばトルコ系勢力も関与した。1908年イラン南西部で巨大油田が発見されると、英国はただちに権益を掌握し、後のアングロイラニアン石油会社を通じて石油支配を進めた。これは現在のBP(ブリティッシュ・ペトロリアム)の前身であり、英国海軍の燃料供給を支える国家戦略そのものだった。